



糸賀一雄の思想形成と近江学園実践について : 近江学園指導記録資料の検討を中心に(PPT資料)

森本, 創

(Citation)

日本特殊教育学会第52回大会(2014高知大会) 自主シンポジウム16 糸賀一雄生誕百年: 史資料の発掘・整理・保存と糸賀一雄研究の展望

(Issue Date)

2014-09-20

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006469>



糸賀一雄の思想形成と 近江学園実践について

—近江学園指導記録資料の検討を中心に—

滋賀県立近江学園
森本 創

糸賀一雄の略歴 ～近江学園創設

- 1914年 鳥取市で出生
- 1930年(16) 松江高等学校理科入学
- 1935年(21) 京都帝国大学文学部哲学科入学
- 1936年(22) 小迫房と結婚
- 1938年(24) 京都帝国大学卒業、第二衣笠小学校勤務
池田太郎、木村素衛との出会い
- 1939年(25) 鳥取連隊に応召、病気により帰郷療養
- 1940年(26) 滋賀県社会教育主事補
- 1941年(27) 知事官房秘書課長
- 1942年(28) 三津浜学園に池田太郎を推薦
- 1943年(29) 池田の紹介で田村一二と出会い、
石山学園に田村を推薦

1946年11月15日近江学園創設

1945年8月(31) 第二次世界大戦敗戦

1946年7月(32) 滋賀県真野浜にて療養

9月 「近江学園設立の趣意書」朝日新聞に発表

11月 生活保護法の救護施設「近江学園」創設

「近江学園三条件」・四六時中勤務・耐乏生活・不断の研究
「どんぐり金庫」全職員の給料をプールし、学園の運営と職員
や家族の生活、将来の相互扶助に充てる

1948年(34) 児童福祉法の施行により県立の児童福祉施設に

1949年(35) 学校教育法に基づく小・中学校の分校を設置

近江学園から枝分かれした施設

- 1950年(36) 養護児(50名)と知的障害児(100名)の数が逆転
重度障害児のために「落穂寮」開設
- 1952年(38) 生産的教育的コロニー「信楽寮」開設
池田太郎が初代寮長に就任
- 1953年(39) 年長女子の職業指導施設「あざみ寮」開設
千葉県に農業コロニー「日向弘済学園」開設
- 1955年(41) 池田太郎「信楽青年寮」開設
- 1960.11～1961.2(46) ヨーロッパ視察、国際会議出席
- 1961年(47) 年長男子の職業指導施設「一麦寮」開設
- 1963年(49) 西日本初の重症児施設「びわこ学園」開設
岡崎英彦が初代園長に就任
- 1966年(52) 「第二びわこ学園」開設

創設当初の糸賀の重度障害児観

当初近江学園は重度障害児を対象としていなかった

近江学園要覧(1946.10)

対象児童一原則知能指数50以上80以下とする

- ・大人になっても5～6歳で発達が止まってしまう「永遠の幼児」
- ・社会的無能力性から生涯の保護を保障する独立施設が必要
- ・重症痴愚児や白痴児は全く非社会的存在である
- ・学園に「沈殿」する者 以上『問題児の対策』(1950.5)より

1950年5月 「さくら組」の重度障害児を
「落穂寮」に分立

「精神薄弱という特殊の中のもうひとつ
白痴という特殊として、この子たちを差別
していなかったであろうか」

『この子らを世の光に』(1965)より



近江学園指導記録資料の検討 と「発達保障」思想の萌芽



NHKラストメッセージ第6集「この子らを世の光に」
(2007.3.20)の誤り

糸賀園長は職員に毎日クラス記録をつけさせ、
毎月提出させていた

学園創設(1946)から糸賀死去(1968)までの間の指導関
係記録資料は約800冊

【第1(萌芽)期】近江学園創立～田中昌人赴任(1946～1956)

【第2(発展)期】学園内で「発達保障」の議論(1956～1960)

【第3(成熟)期】糸賀の逝去(1960～1968)

クラス担任制から集団指導体制へ移行する
1965年度までの20年間分の指導関係資料

約600冊を対象に整理検討
(デジタル化)



糸賀の価値観を変えた重度障害児実践

1951年年度 新「さくら組」編成

・1951年度「さくら組」指導記録への糸賀の書込み

「特にひどい夜尿児を毎晩起こす苦労を思い、頭が下がります。
(中略)さくら組は人類のよろこびの源泉となる日が来ると私は確信
しています。白痴児における成功は、その教育の具体的な記録が、
一般教育を推進させる動力となることを忘れてはならない。」

・1953年度「さくら組」指導記録への糸賀の書込み

「(発達への)疑いの雲を払わねばならない。ただ信ぜよというのでは
ない。一ヶ月や半年や一年でなく、もっともっと努力してみよう。
もはや意志の問題である。『さくら』児はぐんぐんと成長している。
ぴったりした皆のチームワークのせいだろうか、指導の眼の新鮮さ
のせいだろうか。それにもましてたゆみなき努力の賜である。毎日
を新しく希望と感謝にみちている指導者の心のあり方が
子供達にうつるのです。」

近江学園指導記録資料の検討結果

- ①学園の指導記録は、糸賀をはじめとする幹部職員が現場実践を知ると共に、学園の理念や方針を徹底する上で、具体的に効果的な手段であった。
- ②糸賀は、指導記録への書き込みを通して、職員の資質向上のため具体的助言指導を行う共に、職員と児童との人格的交流の追体験を通して、自らの児童観や価値観と対決しながら、自身の思想や理念をまとめ発展させてきた。
- ③糸賀を中心とした学園内での実践と、そのことを通しての社会変革への挑戦は、さまざまなズレ(矛盾や認識の相違)を乗り越える努力の中から生まれたものであるが、それらのズレを克服する上でも指導記録による合意形成は重要な役割を果たしていた。

「発達保障」思想の発展

1956年 京都大学教育心理学教室助手田中昌人が
研究部主任として配属→研究体制の充実

1957.5～1958.4 大阪のコンクリート工業へ集団就職
近江学園から企業への条件 (児童11名、職員2名)

- 1.知能程度の高い者と低い者との混在
- 2.適当な実習期間を設けること(2か月)
- 3.正式就職後も作業並びに生活の指導が行なえる態勢をとる
- 4.将来の生活の保障を十分に考慮すること

1958年 大津市制60周年を機に学園が乳幼児健診に参加
「早期発見早期療育」大津方式へと発展

1960年 田中を中心とした土曜会で「発達保障」の議論始まる

教育権の保障と人材育成論への批判

「この子らを世の光に」

『ひとづくり』のブームで大学の教育が論ぜられ、経済の高度成長のために役立つ教育が求められている。そういう観点から、欠陥児たちが適切な教育を受けて、産業界で役に立つ人的資源に育成されることこそ社会的要請だとされるのである。(中略)ただその考えは私たちの社会では、うっかりすると、逆に、社会に役に立たせることのできないものを教育してなにになるかという考え方に陥りやすい。」 『社会の発達』より

「一次元の世界に住んでいるひとたちは、声なき声をもって訴えている。それは、人間として生きているということは、もともと社会復帰していることなのだということである。ここからここまでが社会復帰、それ以下は社会復帰でないとして、価値的に低いとみるべきではない。しかも、ここからここまでというのが、その時の社会のつこうで勝手にきめられるべきものでもない。すべての人間は生まれたときから社会的存在なのだから、それが生きつづけているかぎり、力いっぱい生命を开花していくのである。」

『この子らを世の光に』より

近江学園指導記録資料の今後の課題

- ・今後の資料整理とデジタル資料の活用について

- ・糸賀思想の継承発展について

糸賀の「発達保障」思想は施設や社会における実践の中で常に検証され、そのことによって社会変革への道筋を照らしてきた。したがって、糸賀思想を単に学問的研究対象や、福祉や教育における実践思想とみるのではなく、個人と社会の発達との関係性においてとらえながら、社会の様々な場面において実践することが重要である。糸賀は「自覚者は責任者である」という言葉を好んで使っていたが、今後の課題は、糸賀の「発達保障」思想を未来社会への展望の中に積極的に位置づけ、具体的ソーシャル・アクションとして発展させること。